

用途

小規模排水処理施設、浄化槽(コミュニティープラント)、下水処理場、し尿処理場、農業集落排水、厨房排水処理施設、食品工場、印刷工場、コンポスト工場、畜産施設、公衆トイレ、その他局所局部の脱臭用。

脱臭剤の性状及び対象ガス

製品名称	EPSR1	EPN1	EPAC1※	EPAC2※	EPAC3※
適用ガス	酸性・両性ガス	アルカリ性ガス	一般ガス	中性ガス	一般ガス
主な臭気物質	硫化水素 メチルメルカプタン	アンモニア トリメチルアミン	一般臭気 VOC	硫化メチル 二硫化メチル	一般臭気 VOC
形状	円柱状	円柱状	破砕状	円柱状	円柱状
粒度(メッシュ)	4~8 95%以上	4~8 95%以上	4~8 95%以上	4~6 95%以上	4~8 95%以上
見掛密度(kg/ℓ)	0.65~0.75	0.65~0.75	0.40~0.50	0.45~0.55	0.40~0.50
硬度(%)	95以上	95以上	95以上	95以上	95以上

※EPAC1・EPAC2・EPAC3は活性炭ベースの脱臭剤です。 ※用途(臭気)に合わせて組合せたいしますので、お気軽にお問い合わせください。

酸性・両性ガス
EPSR1 (ペレット)



アルカリ性ガス
EPN1 (ペレット)



一般ガス
EPAC1 (破砕)



中性ガス・一般ガス
EPAC2・EPAC3 (ペレット)



ボエフ EPSR1が「川崎CNブランド」に認定されました ※川崎CNブランド:川崎市が認定する、川崎発のCO₂削減に貢献する製品・技術

川崎CNブランド2023 認定

カーボンニュートラル(CN)の実現に貢献する製品
やサービスを川崎から世界へ!



川崎メカニズム同時認証
域外貢献度 1.72×10²(t-CO₂)
※使用期間中の累計脱臭剤充填量:35,000kg
製品使用年数 10年間

■ライフサイクルCO₂削減効果

○同一の脱臭設備で活性炭を使用した
場合と比較して、約12%のCO₂
排出量を削減。

活性炭を再生処理して使用する場合と比較してエネルギー消費を大幅に軽減



■製品を通じた社会への波及効果

○既存のあらゆる乾式脱臭設備に充填可能で、既設の活性炭から本製品に変更することで、設備を変更することなくCO₂排出量を削減可能。



荏原実業株式会社

お問い合わせ 〒104-8174 東京都中央区銀座七丁目14番1号
TEL 03-5565-5095 Mail voef@ejk.co.jp
https://www.ejk.co.jp/

※本カタログに記載の仕様・外観は、製品改良のため予告なく変更することがあります。

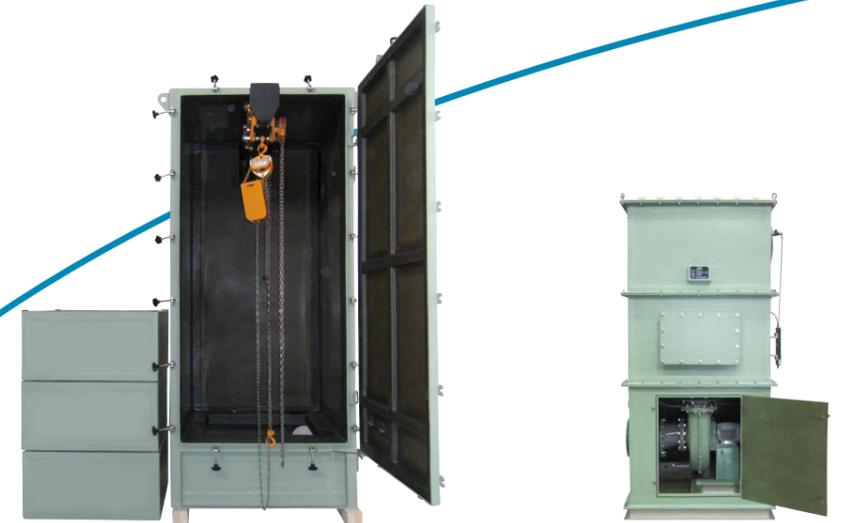
2024.11Ver.1.1

心地よい環境を、未来へつなぐ。



腐植質脱臭剤 ボエフ®

VOEF®



VOEF®

ボエフとは

腐植質脱臭剤「ボエフ」は土壌由来の物質を主成分とした、ペレット状の脱臭剤で、既存のあらゆる乾式脱臭塔に充填可能です。

製造及び再生処理の際に大量のエネルギーが必要な活性炭に対し、本製品を適宜交換して使用することで、ライフサイクル全体でCO₂排出量を削減します。

下水道関係施設等の乾式脱臭設備を始め、農業集落排水施設・厨房・食品工場等幅広い分野の脱臭に適しています。



カートリッジ
内蔵型脱臭塔
(当社製品)

日本下水道事業団
標準仕様書適合脱臭装置例

中性成分吸着剤
上段

アルカリ性
成分吸着剤
中段

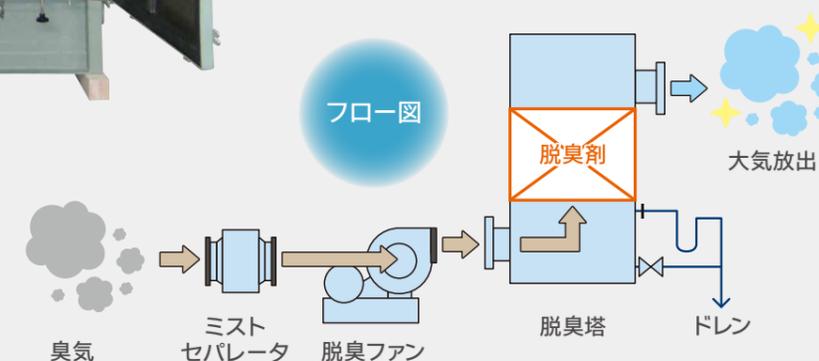
酸性・両性
成分吸着剤
下段



ファン内蔵型
小型脱臭装置
ボエフミニ
(当社製品)



フロー図



腐植質脱臭剤「ボエフ」の特長

①環境負荷が少ない

ライフサイクル全体におけるCO₂排出量は活性炭よりも少なく、活性炭からボエフに置き換えるだけでCO₂排出量の削減に貢献できます。使用後は路盤材へのリサイクルが可能です。

※川崎CNブランド認定(カタログ裏面記載)

②長寿命

ボエフは一般的な活性炭と比較して2倍以上の脱臭能力を持つため、ランニングコストの低減化が図れます。

③湿度に強い

活性炭は微細孔での物理吸着により臭気物質や水分を吸着させるため、高湿度臭気に弱いに対し、ボエフは主に化学反応によって脱臭することから、高湿度臭気でも性能が低下しません。

④塔体が腐食しない

硫化水素を含む臭気の場合、活性炭に吸着された硫化水素が硫酸へと酸化され、ドレン水が脱臭塔を腐食させる事例があります。

一方ボエフでは、脱臭原理の違いから吸着された硫化水素から硫酸が生成されず、脱臭塔を腐食させることがありません。

⑤互換性

既存のあらゆる乾式脱臭塔に充填可能です。

⑥圧力損失が少ない

ヤシ殻活性炭(破碎状)に比べ、ボエフは約35%圧力損失が少なく、脱臭ファン消費電力量の低減が可能であり、省エネ効果及びCO₂排出量の削減が期待できます。